

I 実践

1 研究主題

差別や偏見をなくす人権尊重の精神を養い、一人一人が互いに認め合い、助け合うことのできる児童の育成

(1) 主題設定の理由

本校は、「やさしく さとく たくましく 共に輝く大みかっ子の育成」を教育目標として掲げている。学校教育全体の中で人権尊重の精神を高め、差別や偏見をもたずに誰に対しても公平にふるまう生活態度を育てるため学校を挙げて取り組んでいる。また、各教科・道徳・特活などの特質に応じた教育活動全体を通して、人権が尊重され安心して過ごせる学校・教室を目指し、地域の教育力の活用や体験的な活動の導入、学習形態の工夫に努めている。

本校の児童は、明るく素直であり、思いやりのある言動が多く見られる。しかし、自己中心的な行動や他者の考えや気持ちを受け入れられず思いやりに欠けた言動をする児童もいる。

そこで、学校の教育活動全体を通して、一人一人が互いを認め合い、助け合うことのできる児童の育成を本主題として設定した。

(2) 研究の内容

ア 特別活動、道徳、総合的な学習の時間を中心とした全教育活動における人権教育の充実

イ 豊かな体験活動の展開

2 実践内容

(1) 特別活動、道徳、総合的な学習の時間を中心とした全教育活動における人権教育の充実

ア 道徳の授業の公開

年間の学校公開日のうち、全クラスが道徳の授業を公開する日がある。学年の年間計画や学級の実態に沿って様々な題材が取り上げられるが、担任は児童の心を豊かにするためのよりよい授業展開の工夫を図ることに努める。また、参観の形をとることで、担任と保護者がともに子どもたちの思いや考えを受け止めることができ、情操の深化や実践につなげやすくなる効果もあると思われる。

イ 特別活動や総合的な学習の時間の実践

今年度は、ひたち生き生き百年塾推進校として講師を招いて、地域の歴史や国際理解について様々な学習活動を行なった。

(ア) 4年生

a「レッツ トライ ボランティア」のテーマに沿って、高齢者や体の不自由な人の生活について調べている。社会福祉協議会の講師を招いて車いすや高齢者疑似体験等をした。

b「命の教育」保護者と共に性に関する話や乳児（人形）を抱く体験等を通して、命の尊さを感じることができた。

(イ) 5年生・6年生

a「ワールドキャラバン」県内在住の外国人講師に母国の紹介をしてもらったり、会食をしたりして各国の文化への理解を深めた。

b「国際理解講演会」外国の暮らしを知り、我が国の暮らしと比較することができた。

ウ 帰りの会での友達への称賛

帰りの会では、各学年が実態に応じ、友達の良かったところや頑張ったところ発表する時間を作り互いを認め合う場を設けている。



エ 異学年集団との交流

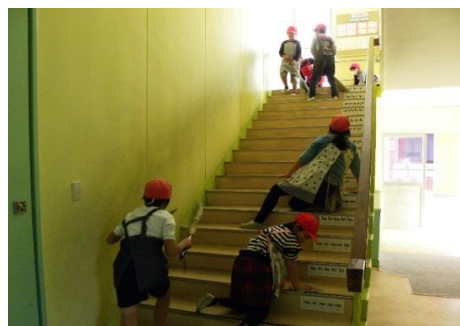
(ア) 縦割り遊び・読み聞かせ

「人間関係を深め、誰とでも仲良く協力して活動できる児童を育てる」「高学年児童は企画・運営することによって主体性を育て、他学年の児童は節度をもって話したり、行動したりする態度を育てる」ことをねらいとして、毎月第3木曜日のロングの昼休みを利用し縦割り班活動を実施している。今年度は、高学年による読み聞かせの活動も実施した。



(イ) 縦割り清掃

年間2回、各回約1か月ずつ縦割り班清掃を行っている。6年生は全員班長となり、それぞれの班に1～5年生が5～7人入り班が構成される。仕事の分担をして毎日同じ清掃場所をきれいにすることで、各班のメンバーが次第に仲良くなっていった。慣れない清掃場所に始めは不安気だった下級生も、上級生の優しい声かけや励ましを受けるうちに笑顔になり張り切って活動することができた。上級生も下級生の模範として、しっかりやろうと頑張りお互いに良い影響を与えた。



(2) 豊かな体験活動の展開

ア ふれあい給食(1・3・5年生)

地域のボランティアや交流センターの委員さんなどを招き、ランチルームで給食を食べる機会を設けている。各学年が工夫を凝らし、日頃の感謝の気持ちを込めて歌や器楽演奏等でもてなした。昔話や学校生活などの話をしながら一緒に時間を過ごすことで、自分たちが地域の方々に見守られていることに気付く良い機会となっている。また、「ありがとう」の感謝の気持ちを伝えられる貴重な場でもある。

イ 大みか交流センター敬老会

毎年9月に行われている大みか交流センター敬老会では、3年生の児童が参加し音楽の発表を行った。地域の方々から、「ありがとう」「楽しかったよ」と声をかけられ嬉しそうに退場する子が多く見られた。「また来年もやってほしい」とたくさんの笑顔をいただいた。

ウ 愛校作業

皆遊タイム(ロングの昼休み)を利用し校庭の清掃を行なった。学年単位で活動範囲を分担したが学校をきれいにしようと協力し合う姿が見られた。

3 成果

様々な活動を通して、児童はお互いを認め助け合うことの大切さを学んでいる。特に縦割り班活動は、回を重ねるごとに高学年が低学年に寄り添ったり、優しく手助けをしたりする姿が見られるようになった。「ありがとう」という言葉に自己有用感や自己肯定感が高まり、更なる活動への意欲づけとなった。また、子どもたちが目や耳や肌で自分以外の多くの人と直接触れ合うことで、縦のつながりを感じながら自他の関係を見つめる良い機会となった。

II 今後の課題

- ・多種多様な人権について考える場や体験活動を設け、自己や他者を大切にする意識や感覚を育て、さらに実践力のある児童の育成を図っていきたい。
- ・家庭・地域への啓発を充実させ、学校・家庭・地域が一体となり人権教育に取り組めるように努めたい。